平成22年度理事会，評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第53回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は，加来浩平会長主宰のもと平成22年5月27，28，29日の3日間，ホテルグランヴィア岡山，岡山コンベンションセンター他において開催された．これに先立つ理事会，評議員会は5月26日岡山プラザホテルにて，また総会は5月27日ホテルグランヴィア岡山にて開催された．

1. 第53回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の経過報告　（加来会長）

2010年5月27日から29日の3日間，ホテルグランヴィア岡山，岡山コンベンションセンターなどの8施設で，第53回日本糖尿病学会年次学術集会を開催いたしました．本学術集会では「糖尿病予防の推進とエビデンスに基づく新たな治療パラダイムの確立」を目標に，テーマを「革新する糖尿病学―予防と治癒へのあくなき挑戦」としました．今後の糖尿病学の進むべき道として，我々には，治療の進歩を礎としつつ，糖尿病を日常の身近な疾患としてとらえ直し，予防と治癒，その先にある克服を目指した学問的挑戦に踏み出す使命が課せられているとの思いが込められています．

本学術集会では，4つの特別講演，20のシンポジウム，1つのワークショップ，12のMeet the Expert Session，9つの教育講演，15のDebate Sessionを準備しました．加えて，過去最高のご応募をいただいた1,872題の一般演題と76題のプレジデントポスターを含む全ての演題について，すばらしいご発表と熱心なご討論を賜ることができました．特に，糖尿病新診断基準発表と国際標準化HbA1cの運用を取り上げたシンポジウム1や，インクレチン関連のシンポジウムは大きな注目を集めました．また，新たな試みとして，二日間同一会場で連続開催したDebate Sessionについては，用意した15題のいずれのテーマも，会場から溢れるほど多数の方々に御来場いただきました．このように，三日間を通じて，会員の先生方の熱心さ，勤勉さに溢れた学術集会となりました．

また今回は，開催・運営面でも「革新」を意識し，事前参加登録と共催セミナーオンライン予約システムを初めて導入しました．新しい試みにも関わらず，参加者の50%超の方々から事前参加登録を頂戴でき，参加者の利便性向上，当日受付・セミナー予約現場の混雑緩和のみならず，学術プログラムにフォーカスできる環境整備の一助となり得たものと考えております．また，新たにプログラムに加えた「理事長声明」により学会から会員へ，「プレス会見」により学会外へ，それぞれメッセージを発信しました．さらに，第三日目早朝に一般市民を含む約350名の参加を得て開催したMorning Run，協会との共同開催で2,000名の一般市民の方々の御来場を得た市民公開講座とともに，学会内外に向けた様々なメッセージを本学術集会から発することができたものと考えております．

また，昨年に引き続く第2回Asian Association for the Study of Diabetes（AASD）年次学術会議の共同開催に加え，新たにEuropean Association for the Study of Diabetes（EASD）との共催企画である1st East West Forumを開催しました．このようにアジア，ヨーロッパの国々の専門家と手を携えて，「糖尿病治療と予防に挑戦し続ける」とのメッセージを，岡山の地より発信できたことは大変意義深いものであり，両会議の開催に関係された多くの先生方のご尽力に対して心よりお礼申し上げます．

お陰様をもちまして，地方都市開催にもかかわらず，10,000名を超える方々のご参加を得て，つつがなく全日程を終了させていただきましたが，初日から予想以上に多くの先生方にご来場いただくという有難い誤算などもあり，一部の会場では十分なキャパシティーを確保できなかったこと，更には事故防止のための入場制限を一時行わせていただいたことなど，御迷惑を多々おかけした点もございました．何とぞ，ご容赦賜りますようお願い申しあげます．最後に，本学術集会の開催にご協力賜りました会員各位に，あらためて感謝申しあげます．

2. 平成21年度事業報告および庶務報告（河盛理事）

●事業報告

1）第52回年次学術集会

会　長　柏木厚典（滋賀医科大学理事・病院長）

会　期　平成21年5月21日（木）（午後）～5月24日（日）（午前）

会　場　大阪国際会議場，リーガロイヤルホテ

ル大阪，ホテル NCB
参加者　6,750 名
○会長講演　糖尿病と血管病～その特徴，現状，未来～
○特別講演　自然免疫の最近の進歩
○特別講演　ゲノム医科学からゲノム医療への潮流
○特別講演　Building New Islets by Manipulating Cell Fate and Determination
○特別講演　Cellular Mechanisms of Insulin Resistance : Implications for Obesity, Lipodystrophy, Metabolic Syndrome and Type 2 Diabetes
○特別講演　UKPDS-the first 30 years
○学会賞受賞講演
ハーゲドーン賞　Slowly progressive insulin-dependent（type 1）diabetes mellitus（SPIDDM：緩徐進行 1 型糖尿病）の診断，病態および進展阻止に関する研究
リリー賞　①2 型糖尿病発症における膵 β 細胞障害の分子機構
②膵β細胞容積調節機構に関する研究
○Featured Symposium
1. 老化，抗老化の科学～糖尿病とのかかわり～　他 4 題
○アジア糖尿病予防サミット
1. AASD Kick-off Symposium　Pathophysiology of Type 2 Diabetes in Asia
2. Round-Table Discussion　How to Treat Asian Diabetes
○シンポジウム
1. 1 型糖尿病の発症機序はどこまで解明されたか　他 11 題
○ジョイントシンポジウム
1. 糖尿病患者の心血管病管理をめぐって（日本循環器学会との連携）　他 3 題
○ワークショップ
1. 最適なインスリン治療を目指して　他 3 題
○コントラバーシー
1. 冠動脈疾患の管理　PCI，CABG，薬物療法　他 1 題
○Late-breaking Session
1. クリニカルトライアル
○Meet the Expert
1. 質量分析技術を利用したガス分子によるエネルギー代謝制御機構の系統的探索　他 3 題
○教育講演
1. 糖尿病患者に対するフットケア　他 17 題
○World WIDE Education Program
1. Clinical application of evidence-based medicine for effectively managing Type 2 diabetes: considerations for incretin therapies
○Case Study
1. 有痛性神経障害患者の管理（糖尿病・神経内科・麻酔科）　他 1 題
○糖尿病劇場
第 1 幕　入門編　患者面接―心にアプローチ
第 2 幕　実践編　患者面接―そのときあなたは
○口演発表　705 題
○ポスター　1,124 題（内，プレジデント 115 題を口演・ポスター演題から選考）

2）出版事業
①会誌「糖尿病」第 52 巻 4 号，サプルメント 1（抄録集）～第 53 巻 3 号を発行
②糖尿病患者向け指導書
i　糖尿病食事療法のための食品交換表　第 6 版　200,000 部発行
ii　糖尿病治療の手びき　改訂第 54 版　増刷なし
iii　糖尿病性腎症の食品交換表　第 2 版　10,000 部発行
iv　糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM 版（ver. 3）　600 部発行
v　糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 版（ver. 2）付き　500 部発行
vi　Food Exchange List　400 部発行
vii　糖尿病食事療法のための食品交換表　活用編　10,000 部発行
③医師，コ・メディカル向け指導書
i　こどもの糖尿病・サマーキャンプの手引き　第 3 版　増刷なし
ii　糖尿病食事療法指導のてびき　第 2 版　3,000 部発行
iii　糖尿病療養指導の手びき　改訂第 3 版　1,000 部発行
iv　糖尿病治療ガイド 2008-2009　21,000 部発行
v　糖尿病学用語集　第 2 版　増刷なし
vi　糖尿病遺伝子診断ガイド　第 2 版　増刷なし
vii　糖尿病専門医研修ガイドブック　改訂第 4 版　5,000 部発行
viii　小児・思春期糖尿病管理の手びき改訂第 2 版　増刷なし

ix　糖尿病学の進歩　43 集　1,200 部発行
x　糖尿病の療養指導　2009　1,200 部発行
xi　科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン改訂第 2 版　増刷なし
xii　Treatment Guide for Diabetes 2007　増刷なし

3) 第 44 回「糖尿病学の進歩」
世話人　三家登喜夫（和歌山県立医科大学医学部臨床検査医学）
会　期　平成 22 年 3 月 5・6 日（金・土）
会　場　大阪国際会議場（大阪市）
参加者　4,365 名
（平成 22 年 3 月 7 日（日）：市民公開講座「糖尿病の検査」和歌山県立医科大学講堂，参加者 150 名）

①第 1 日目
A 会場（医師/コメディカル向け）
○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識 1
1. 糖尿病を理解するための基礎知識 1：“糖のながれ”を理解しよう　他 5 題
○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識 2
1. 糖尿病薬物治療のストラテジー　他 5 題
B 会場（医師向け）
○レクチャー：糖尿病診療に必要な知識 1
1. 1 型糖尿病の成因と分類　他 5 題
○レクチャー：糖尿病診療に必要な知識 2
1. 2 型糖尿病の成因―脂肪組織の炎症によるインスリン抵抗性を中心に―　他 6 題
C 会場（研究者向け）
○レクチャー：糖尿病研究の進歩と展望 1
1. メタボリックシンドロームと慢性炎症　他 5 題
○シンポジウム：糖尿病研究の進歩と展望 2―膵 β 細胞死の分子機構―
1. 2 型糖尿病における膵 β 細胞の病理　他 5 題
D 会場（医師/コメディカル向け）
○シンポジウム：慢性合併症の臨床 1（神経障害）
1. 糖尿病性末梢神経障害の成因：IGT の関与を含めて　他 3 題
○レクチャー：慢性合併症の臨床 1（網膜症）
1. 糖尿病網膜症の成因と治療の進歩　他 1 題
○レクチャー：慢性合併症の臨床 2（足病変）
1. 慢性合併症の臨床（足病変）
○シンポジウム：慢性合併症の臨床 2（腎症）
1. 腎症の成因　他 5 題
○シンポジウム：慢性合併症の臨床3(大血管障害)
1. 脳卒中と糖尿病　他 5 題
E 会場（療養指導士向け）
○CDE セッション：療養指導士に必要な技能 1
1. 糖尿病とその治療に関わる心理的問題―糖尿病医療学入門―　他 4 題
○CDE セッション：療養指導士に必要な技能 2
1. SMBG 等検査技師に役立つ技能　他 4 題

②2 日目
A 会場（医師/コメディカル向け）
○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識 3
1. 糖尿病性神経障害　他 5 題
○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識 4
1. 糖尿病と歯周病の意外な関わり　他 5 題
B 会場（医師向け）
○レクチャー：糖尿病診療に必要な知識 3
1. 高齢糖尿病患者の特徴と治療　他 5 題
○レクチャー：糖尿病診療に必要な知識 4
1. 総論：薬物治療の選択と治療の進め方　他 4 題
○レクチャー：糖尿病専門医受験/更新のためのセミナー
1. 糖尿病専門医取得の意義と準備
C 会場（研究者向け）
○シンポジウム：糖尿病研究の進歩と展望 3―慢性炎症と耐糖能異常―
1. アディポネクチンの抗炎症作用　他 5 題
○レクチャー：糖尿病研究の進歩と展望 4
1. 2 型糖尿病の病態形成におけるインスリン分泌機構の障害　他 5 題
D 会場（医師/コメディカル向け）
○レクチャー：慢性合併症の臨床 4（糖尿病合併症のエビデンス）
1. DCCT/EDIC と「Metabolic Memory」
E 会場（療養指導士向け）
○CDE セッション：療養指導士に必要な技能 3
1. 糖尿病劇場「糖尿病療養指導の評価：インスリン導入場面を検証する」　他 1 題
○CDE セッション：療養指導士に必要な技能 4
1. NST からみた糖尿病の適正カロリー―基礎と実際―　他 2 題

4) 地方会活動
1. 第 43 回日本糖尿病学会北海道地方会
会　期　平成 21 年 11 月 8 日（日）

会　場　旭川グランドホテル
会　長　羽田勝計（旭川医科大学内科学講座（病態代謝内科学分野））
参加者　457 名

2. 第 47 回日本糖尿病学会東北地方会
会　期　平成 21 年 11 月 7 日（土）
会　場　仙台国際センター
会　長　岡　芳知（東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学分野）
参加者　727 名

3. 第 47 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会
会　期　平成 22 年 1 月 30 日（土）
会　場　大宮ソニックシティ
会　長　川上正舒（自治医科大学附属さいたま医療センター）
参加者　1,800 名

4. ①第 79 回日本糖尿病学会中部地方会
会　期　平成 21 年 4 月 18 日（土）
会　場　名古屋国際会議場
会　長　片田直幸（JA 愛知厚生連豊田厚生病院内科）
参加者　640 名
②第 80 回日本糖尿病学会中部地方会
会　期　平成 21 年 10 月 17 日（土）
会　場　アクトシティ浜松コングレスセンター
会　長　中村浩淑（浜松医科大学第二内科）
参加者　418 名

5. 第 46 回日本糖尿病学会近畿地方会
会　期　平成 21 年 11 月 3 日（火）
会　場　国立京都国際会館
会　長　中村直登（京都府立医科大学免疫内分泌内科）
参加者　1,894 名

6. 第 47 回日本糖尿病学会中国・四国地方会
会　期　平成 21 年 11 月 6・7 日（金・土）
会　場　岡山コンベンションセンター
会　長　岡﨑　悟（心臓病センター榊原病院内科）
参加者　934 名

7. 第 47 回日本糖尿病学会九州地方会
会　期　平成 21 年 10 月 23・24 日（金・土）
会　場　リーガロイヤルホテル小倉
会　長　桶田俊光（新小倉病院糖尿病センター）
参加者　1,721 名

5）分科会活動

第 24 回日本糖尿病合併症学会
会　期　平成 21 年 10 月 9・10 日（金・土）
会　場　岡山コンベンションセンター
会　長　槇野博史（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科腎・免疫・内分泌代謝内科学）
参加者　766 名

6）糖尿病週間

平成 21 年 11 月 9 日～15 日，第 45 回全国糖尿病週間の行事が一斉に行なわれた．テーマは「ブルーの輪広げて向き合う　糖尿病」.

7）国際糖尿病連合会議

・IDF-WPR Council Meeting（2009.10.17, Montreal, Canada）への出席
・IDF General Council Meeting（2009.10.18, Montreal, Canada）への出席
・IDF Board Induction program, IDF Executive Board Meeting（2010.1. 28–31, Brussels, Belgium）への出席

8）普及・啓発・後援事業

①第 45 回全国糖尿病週間の共催
期　間　平成 21 年 11 月 9 日（月）～15 日（日）
②日本糖尿病協会への協力
「さかえ」および「つぼみ」発行の企画等
③世界糖尿病デーへの参加
第 3 回「世界糖尿病デー」関連イベントの開催
平成 21 年 11 月 14 日
④「メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーン」
平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日
⑤2009 年度全腎協全国大会 in 愛知
平成 21 年 5 月 23 日・24 日
⑥世界口腔保健学術大会記念「第 15 回口腔保健シンポジウム」　平成 21 年 7 月 4 日
⑦ヘモグロビンエーワンシー（HbA1c）認知向上運動
～糖尿病の予防と治療を目指して～
平成 21 年 7 月 11 日
⑧第 12 回糖尿病地域医療研究会総会
平成 21 年 7 月 25 日
⑨第 26 回糖尿病 Up・Date　賢島セミナー
平成 21 年 8 月 22 日～23 日
⑨平成 21 年度「食育健康サミット」
平成 21 年 10 月 8 日
⑩糖尿病シンポジウム
平成 21 年 10 月 25 日・11 月 8 日
⑪東京新聞フォーラム「糖尿病と向き合う」
平成 21 年 10 月 27 日
⑫市民公開講座「糖尿病と上手に付き合うために

～病態から薬物・インスリン療法まで～」
平成21年11月3日
⑬第7回1型糖尿病研究会
平成21年11月7・8日
⑭生活習慣病対策展2009
平成21年11月11日～13日
⑮糖尿病予防キャンペーン
平成21年11月12日・12月13日
⑯日本臨床衛生検査技師会主管糖尿病予防啓発事業　平成21年11月15日
⑰市民公開講座「糖尿病と上手に付き合うために」―正しい理解で合併症を防ぐ―
平成21年11月22日
⑱第9回日本先進糖尿病治療研究会
平成21年12月5日
⑲第21回日本糖尿病性腎症研究会
平成21年12月5日～6日
⑳第21回分子糖尿病学シンポジウム
平成21年12月12日
㉑糖尿病重症化予防（フットケア）研修会
平成21年12月19日～20日
㉒「なくそう減らそう歯周病シンポジウム」
平成22年2月28日
㉓肥満・糖尿病，栄養と口腔保健推進セミナー
平成22年3月22日

●庶務報告

1)総会

平成21年5月21日，大阪国際会議場にて第52回通常総会を開催した．平成20年度事業報告，庶務報告，収支決算報告が承認され，また平成21年度事業計画追加および補正予算ならびに平成22年度事業計画および予算が承認された．第55回会長に渥美義仁学術評議員が選出・承認された．

2)評議員会および学術評議員会

平成21年5月20日にそれぞれ開催された．

3)理事会

定例理事会は平成21年5月20日，11月29日，臨時理事会は平成21年10月12日，平成22年3月4日の合計4回開催された．

●会員状況報告（平成22年3月31日現在）

1．役員等

1)役員

理　事　19名（20年度末　19名）
監　事　2名（20年度末　2名）

2)学術評議員　609名（20年度末　610名，物故者1名）

3)評議員　80名（20年度末　88名，8名減）

2．会員等

1)名誉会員　29名（20年度末　27名，追加2名）

2)正会員

21年3月末日会員数	16,024名	
21年度新入会	626名	
名誉会員へ	−2名	
退会	−431名	退会内訳：
		希望退会　321名
		会費未納　87名
		物故者　23名
正会員　現在数	16,217名（193名増）	

3)賛助会員

21年3月末日会員数	41名
21年度新入会	3名
賛助会員　現在数	44名（3名増）

3．物故会員

功労学術評議員　伊東三夫　日野佳弘
学術評議員　藤枝憲二
正会員　泉　嗣彦　磯崎典子　井田正彦
今井みさこ　上田宗宏　上野山林造
片倉吉昭　川口篤則　菊池幹雄
小林　正　齋藤春雄　齊藤広志
佐藤孝夫　髙村香代子　筒井一哉
平野眞司　堀　晶子　松田充浩
山下真木夫　山田治男
（敬称略，連絡のあった方のみ）

3．委員会報告

1)「糖尿病」編集委員会　委員長　小泉順二

1．委員会の開催：6回（平成21年4月5日，5月23日，7月12日，9月13日，11月8日，平成22年1月31日）

2．論文受付状況（平成21年4月1日から平成22年3月31日）

①新規投稿論文受付総数127編【内訳：原著39編，症例49編，ミニレビュー2編，短報1編，報告2編，委員会報告1編，編集者への手紙4編，コメディカルコーナー29編（原著26編，短報2編，報告1編）】

②採否決定した論文数133編（内訳：可85編，否31編，辞退17編）

③採択率は73%　④採択日から掲載までの期間は2ヶ月．

3．出版状況：第52巻4号から第53巻3号までの12誌とSupplement 1「第52回年次学術集会抄録号」を発行．詳細は次頁表の通り（下段：コメディカルコーナー）．

	総頁数	原著	症例	ミニレビュー	短報報告	受賞講演	地方会記録	委員会報告	編集者への手紙	会報	特集
Vol. 52 No. 4	48	1 1	6	1							
Supplement 1	第 52 回年次学術集会抄録号										
No. 5	98	1	2				1		1		1
No. 6	88	3	3				1			1	1
No. 7	172	3 1	3				1			1	1
No. 8	72	2 1	4								1
No. 9	86	2 1	5					1			1
No. 10	54	2 1	5		1						
No. 11	60	2 1	4			3					
No. 12	106	1 1	4	1			1				
Vol. 53 No. 1	74	1 2	4		1		1		1	1	
No. 2	82	2 1	2		1		1				1
No. 3	61	2	5				1				
合計	1,001	22 10	47 —	2 —	2 1	3 —	7 —	1 —	2 —	3 —	6 —

4. 審議・検討した主たる事項

①委員改選に伴い委員長選出を行った結果，委員長に小泉順二委員，委員長の指名により副委員長には吉岡成人委員に決定した．

②出版社の見直し，新出版社との契約締結

前出版社の医学書院に依頼してから 10 年経過に伴い見直しを行った結果，出版社選定作業を行った．15 社に依頼し 11 社から回答あり（医学書院は辞退の回答），各社から提示された見積および提案書を基に 5 社に絞り込み，その後プレゼンテーションの結果，杏林舎に決定，第 53 巻 1 号（2010 年）からの契約を締結した．またそれに伴い表紙デザインのリニューアルも行った．

③広告料金および掲載場所の見直し

出版社変更に伴い広告の掲載場所および料金設定の見直しを行った結果，前づけ色紙，中付（論文と論文の間）の広告を廃止，全て奥付の後にまとめることに決定した．リニューアルに合わせ第 53 巻 1 号からの適用とし，広告料についても 4 月から変更を行った．

④英文誌発刊にあたり和文誌との併存について，本学会員の英文論文が他雑誌に投稿されている現況などを考えると英文誌の存在意義は大きく，和文論文の需要も多く現行のまま存続させ英文誌と併存させていくことで承認された．

⑤英文誌との関係も考慮して，投稿規定の見直しを検討中である．研究についての倫理委員会承認事項および利益相反に関する記載なども検討している．

2)「Diabetology International」編集委員会

委員長　春日雅人

平成 21 年 2 月の臨時理事会で英文誌発刊の方向が承認され，英文誌発刊準備委員会が設置された．準備委員会を 4 回開催してその概要について検討し，平成 21 年 11 月の定例理事会に提案し，基本的に了承された．これを受けて，各支部より計 21 名の委員が推薦され，第 1 回英文誌編集委員会が平成 22 年 2 月に開催された．委員長には春日雅人委員が選出され，編集委員会の構成，Springer 社への委託等について討議し，概略承認された．第 2 回英文誌編集委員会が 3 月に開催され，英文誌名を「Diabetology International」とすること，Editorial committee の構成，Aims and Scope の文言（次頁参照）が承認された．また，表紙のデザ

イン，編集委員の分担，Instruction for Authors，Reviewer のリスト等についても大略決定された．現時点での予定としては，季刊として第1号は9月発刊，但しオンラインでは7月～8月から up する予定である．

Aims and Scope

Diabetology International

Diabetology International, the official journal of the Japan Diabetes Society, publishes original research articles about experimental research and clinical studies in diabetes and related areas. The journal also presents editorials, reviews, commentaries, reports of expert committees, and case reports on any aspect of diabetes. All manuscripts are peer-reviewed to assure that high-quality information in the field of diabetes is made available to readers. *Diabetology International* welcomes submissions from researchers, clinicians, and health professionals throughout the world who are involved in the treatment and care of patients with diabetes.

Editor-in-chief　Masato Kasuga

Executive board
K. George Alberti，Graeme I. Bell，Philippe Froguel，Wilfred Fujimoto，David E. James，Hans Ulrich Häring，C. Ronald Kahn，George King，Emmanuel Van Obberghen，Hans−Henrik Parvi，Bruce Spiegelman，Jaakko Tuomilehto，Paul Zimmet，

Editorial board
Yoshihito Atsumi，Eiichi Araki，Toshiaki Hanafusa，Masakazu Haneda，Nigishi Hotta，Nobuya Inagaki，Yasuhiko Iwamoto，Takashi Kadowaki，Kohei Kaku，Ryuzo Kawamori，Junji Koizumi，Jiro Nakamura，Kishio Nanjo，Yoshitomo Oka，Yutaka Seino，Naoko Tajima，Yukio Tanizawa，Fumio Umeda

Associate editor
Toshiya Atsumi，Atsuko Abiko，Makoto Daimon，Hiroto Furuta, Shinpei Fujimoto, Kazuma Takahashi，Hisamitsu Ishihara，Hiroshi Hirose，Takahisa Hirose，Toyoshi Inoguchi，Yoshiaki Kido，Hiroshi Maegawa，Shigeru Okuya，Haruhiko Oosawa，Hiroshi Sakura，Toshinari Takamura，Kazuyuki Tobe，Kazunori Utsunomiya，Kazuya Yamagata，Kentaro Yamada

Assistant editor
Yasushi Kaburagi，Michihiro Matsumoto，Ritsuko Yamamoto-Honda，

3)「食品交換表」編集委員会　　委員長　石田　均

(1)食品交換表編集委員会を平成21年5月22日（土），9月13日(日)，ならびに平成22年2月14日（日）の3回開催した．また，カーボカウント小委員会を平成21年11月23日(祝・月)，平成22年3月6日（土）の2回開催した．

(2)出版事業について［平成21年4月1日～平成22年3月31日，（　）は発行以来の累計部数］
出版事業は順調で，食品交換表の累計出版部数は250万部に上った．

○食品交換表　第6版
売上部数：172,818部（2,398,203），発行部数：200,000部（2,500,000）
なお，平成22年5月下旬に第26刷100,000部発行の予定

○糖尿病性腎症の食品交換表　第2版
売上部数：7,609部（84,828），発行部数：10,000部（93,000）

○糖尿病食事療法指導のてびき　第2版
売上部数：1,622部（16,230），発行部数：3,000部（19,000）

○食品交換表の英訳版
売上部数：288部（2,362），発行部数：400部（2,900）

○CD-ROM版食品交換表（ver. 3）
売上部数：678部（7,546），発行部数：600部（8,100）

○CD-ROM版（ver. 2）付糖尿病性腎症の食品交換表
売上部数：148部（1,912），発行部数：500部（2,500）

○食品交換表　活用編
売上部数：11,484部（46,327），発行部数：10,000部（50,000）

(3)引用許可願いの審査（平成21年4月1日～平成22年3月31日）

○食品交換表　第6版：申請39件
無条件許可18件，条件付き許可18件，不許可2件，審査中1件．

○糖尿病食事療法指導のてびき　第2版：申請2件．無条件許可2件．

(4)食品交換表無断引用サイト
会員からのご指摘を受け，食品交換表の無断引用サイトの調査を行い，掲載の取り下げと引用許可願いの申請を要請した．その結果，ほとんどは要

請に応じて掲載を取り下げた．今後は半年ごとに，無断引用サイトの調査を行う．

(5)食品交換表の改訂とカーボカウント小委員会

食品交換表の改訂とあわせて「カーボカウント」についても検討を行う目的で，内規を定めて「カーボカウント小委員会」を設置した．小委員会ではまず当面の課題として，食品交換表の改訂とは別に「カーボカウントの手引書」を作成する予定である．

4)「治療の手びき」編集委員会　委員長　西沢良記

●今年度は，2009年5月23日（第52回日本糖尿病学会総会会期中）および2010年3月6日（第44回糖尿病学の進歩会期中）の2回の委員会を開催した．5月の委員会において半数の委員（5名）が任期満了となり新たな委員が選出された．また，委員長は西沢が留任することを確認した．

●本委員会が編集実務を行っている患者用書籍『糖尿病治療の手びき（改訂第54版）』(2006年2月発行，南江堂）については，①糖尿病の診断基準の見直しの反映，②『科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2010』との整合性（歯周病とインフルエンザの内容の反映)，③インクレチン療法の追加，④CGM(持続血糖モニター)の内容の反映，⑤妊娠糖尿病の診断規準の見直しの反映，を基本方針として改訂することを委員会で確認し，改訂目次案を現在検討中である．今後，2010年5月の「第53回日本糖尿病学会総会」までに改訂目次案を作成し，学会時に委員会を開催して改訂目次案・執筆者案を最終確認する予定である．その後は，2010年9月の原稿締切，2011年5月までを刊行目標として進行予定である．なお，現状の改訂第54版には，新しいインスリン製剤と経口血糖降下薬の内容を増刷時に修正している．

●指導者（医師・コメディカル）用書籍『糖尿病療養指導の手びき(改訂第3版)』(2007年5月発行，南江堂）は，『糖尿病治療の手びき』と目次を統一しているため，『糖尿病治療の手びき』の改訂が済んだ後に改訂の実務に着手する予定である．

●なお，2010年2月時点において，『糖尿病治療の手びき（改訂第54版)』の売上は約15万部，『糖尿病療養指導の手びき（改訂第3版)』の売上は約3200部である．

5)小児糖尿病委員会　委員長　雨宮　伸

1.「小児・思春期糖尿病の手びき（改訂第3版）―コンセンサスガイドライン」発行について

本委員会編集書籍『小児・思春期糖尿病管理の手びき』をベースにコンセンサス・ガイドラインとして改訂作業を進める．従来のものから大幅な紙数の増加をさけ，各章にステートメントをつけて「小児・思春期糖尿病の手びき(改訂第3版)―コンセンサスガイドライン」とすることとなった．現在査読委員に原稿が渡っている．刊行は2011年2月を予定している．

2. 2011年のISPADサイエンススクールの日本での開催について

若手小児糖尿病専門家の養成のためのISPADサイエンススクールは2011年9月30日～10月5日に湘南国際村センターで開催予定である．担当責任者は日本大学駿河台病院浦上達彦先生である．欧米以外での開催ははじめてであり，日本糖尿病学会の国際交流委員会ISPAD部会としても支援を予定しており，日本糖尿病学会と日本小児内分泌学会からのサポートを要請した．日本糖尿病学会からも講師派遣を要請の予定である．日本小児内分泌学会もISPADを正式な関連学会として承認した．

3. 小児科医の糖尿病専門医取得について

小児科医が糖尿病専門医を取得できる施設の条件緩和が承認されたので，当委員会でも各地方会を通して体制変更について積極的に支援していく．また，小児糖尿病を診ていることの多い小児内分泌学会の医師にも年次集会で日本糖尿病学会への加入を紹介した．

6)日本糖尿病協会委員会　委員長　佐々木敬

1. 委員会は平成22年3月6日に開催され，担当理事ならびに各支部の委員により今後の患者療養，協会活動との関わりにつき意見交換がなされた．
2. 世界糖尿病デー関連イベントは糖尿病対策推進会議を通して協力している．一方，県医師会の講演会などのイベントにおいては学会には県単位の組織がないため，学会の関与につき工夫が必要ではないかとの意見が出された．
3. 糖尿病健康手帳の改訂がなされる可能性につき，報告がなされた．学会としても引き続き，健康手帳の普及，使用に協力する旨，確認された．

7)選挙管理委員会　委員長　春日雅人

委員　柳澤克之　高橋和眞　山田信博　榊原文彦　三家登喜夫　江草玄士　豊永哲至

(1)例年同様，本委員会は郵便，e-mail等を利用して委員会活動を進めていくこととし，従来の申し合わせに従い，理事会推薦の春日雅人委員を委員長とし，以下の事項を確認した．

22年度「会長選挙」の手順は前年度「会長選挙手順」を踏襲し，

・支部からの推薦締切日は平成21年11月15日（日）とする．

・推薦された方の意思確認は11月25日（水）までに事務局必着とする．

・理事長への報告は11月27日(金)までに行う．

・11月29日（日）の定例理事会で，最終候補者3名を決定する．

・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし，平成22年1月8日（金）を締切日とする．

・候補者の所信が提出された後に委員会を開催する．

(2)平成22年2月11日に委員会を開催し，以降の進め方について協議検討した．

1. 会長選出手順およびこれまでの手順についてそれぞれ確認した．
2. 所信の確認
   3名の候補者から提出された所信について印刷の字体や文字数，行間隔などを検討し調節した．
3. 今後の手順について
   所信の手直し終了後に，規則に則り従来の形で理事長への報告，会員への周知，学術評議員への所信の送付等を行うことが確認された．
4. 学術評議員会での投票手順の確認について

①開票作業には，会長候補者のいない支部の委員と，候補者のいない支部から委員長が指名した者，委員長を含めて合計8名であたる．今回は北海道支部，東北支部，中部支部，および中国・四国支部所属の出席者から，3名に依頼する．
また，委員に欠席者がある場合は，上記4支部所属の出席者の中から追加して依頼する．

②昨年と同様に投票用紙配布直前に会場を閉鎖し，回収後開放する．このことは，学術評議員へ候補者の所信を送る際に記載する．

③今回は候補者名を予め投票用紙に記載し，所定の欄に丸印を付したものを有効とする．

④最多得票者に決定する．同数の場合は学会入会年月の早い者とする．

⑤各候補者の得票数は公表する．

⑥迅速に開票作業を行うため，投票用紙を折り曲げて投票する場合は「横二つ折りまで」とすることを注意事項として通達する．

以上は，議場で予め公表する．

8)年次学術集会運営委員会　　委員長　南條輝志男

平成21年4月11日に第一回委員会，5月22日に第二回委員会を開催した．

将来計画委員会からの提案をふまえ，年次学術集会の運営に3～5年の複数年同一業者を継続利用すること，Young Investigator's Awardの制定に向けて検討した．

9)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長　南條輝志男

第45回「糖尿病学の進歩」に向けてのプログラム委員会を平成22年4月15日に開催した．三家世話人から第44回に関する報告，山田世話人から第45回の予定についての報告がなされた．また，今後の「糖尿病学の進歩」の開催時期，書籍「糖尿病学の進歩」および「糖尿病の療養指導」の発行の見直しについて検討がなされた．

10)内科系学会社会保険連合　　委員　渥美義仁

委員　春日雅人，加来浩平，渥美義仁

平成21年度は2年に一回の診療報酬改定に向けた要望活動を内保連を通して行った．①糖尿病腎症予防に適切な栄養食事管理を行うための管理栄養士による栄養食事指導，②非インスリン治療糖尿病患者への血糖自己測定の適応拡大，の二点を糖尿病学会からの主要望として提出した．他学会との連帯提案は③グリコアルブミン（GA）の慢性維持透析患者外来医学管理料包括からの除外，④尿中アルブミン定量精密測定による高血圧性心血管・腎障害の早期診断と経過（治療効果）追跡，⑤CKD症例を対象とした，かかりつけ医との診療連携，⑥イヌリンクリアランスの生体検査としての診療報酬算定の適正化，などとした．糖尿病腎症予防に適切な栄養食事管理を行うための管理栄養士による栄養食事指導は，前回の改訂で新設された糖尿病合併症管理料（フットケア）と同様に重要な合併症予防の充実したチーム医療の実現に向けた要望である．非インスリン使用例での血糖自己測定は，IDFのガイドラインでも標準ケアとされている治療法であるので継続して要望した．前回改訂された項目など活用して有用性を示すことなどに学会員の協力をお願いしたい．CGMの保険収載，GLP-1アナログ注射薬の在宅自己注射指導管理料の適応，について，当為委員会で検討と手続きを行い理事会を通して厚労省に要望した．

11)日本医学会に関する報告　　評議員　門脇　孝

平成22年2月24日に第77回定例評議員会が開催された．日本呼吸器内視鏡学会の新規加盟が承認された．平成22年4月1日から2年間の次期役員として，会長に髙久史麿，副会長に岸本忠三，久道茂，門田守人の各氏が選出された．

第28回日本医学会総会は，平成23年4月8日～10日，矢崎義雄会頭，小川秀興・開原成允・鈴木聰男各副会頭，永井良三準備委員長の下，「いのちと地球の未

来をひらく医学・医療―理解・信頼そして発展―」をテーマに東京で開催される．

12）国際交流に関する報告　　理事　田嶋尚子

1．報告事項

①IDF 関連事項

IDF Congress 2009 が 2009 年 10 月 18 日～22 日 にモントリオール（カナダ），約 12 万人が参加した．IDF Atlas 第 4 版が出版され，世界における糖尿病患者数は 2 億 8500 万人，2030 年には 4 億 4000 万人に達すると予想した．

IDF General Council Meeting が IDF 会期中に開催され，160 カ国・200 以上の団体が参加した．日本の投票権は 6 票となった．定款変更ならびに 2010–2012 年度の活動が承認された．Prof. Jean Claude Mbanya（カメルーン）が新会長に就任，次期会長に Sir Michael Hirst（UK）を選出した．清野裕理事は IDF-WPR 議長に就任した（任期は 2012 年まで）．

IDF Board Induction program，IDF Executive Board Meeting（2010 年 1 月 28 日～31 日）がブリュッセル（ベルギー）で開催され，IDF 理事会新任メンバーに対するガイダンスや Governance Review Committee の活動，タスクフォースメンバーの選考，2009 決算，2010 予算，地区オフィスの場所等を検討した．清野裕理事が出席した．

②IDF，IDF-WPR 関連会議

IDF-WPR Council Meeting（2009 年 10 月 17 日，モントリオール）が開催され，IDF 定款変更，総会議題などについて検討した．

IDF-WPR Executive Meeting（2010 年 4 月 2 日，東京）において，2010–2012 の WPR action plan，2012 年開催予定の第 9 回 IDF-WPR 会議の候補地について等を検討した．

第 8 回 IDF-WPR Congress（2010 年 10 月）釜山（韓国）で開催される．日本は，学術会議に積極的に参加するほか，Global Village にも出展する予定である．

2．平成 21 年度の主な活動

①国際的な学会活動に関する事項

第 2 回 AASD 年次集会（2010 年 5 月，岡山）開催に向けて準備が進められた．2010 年 4 月現在，AASD 入会者 1,201 名，登録演題数は 150 題で年次集会参加者は 200 名以上と予測している．

AASD の機関紙である JDI への投稿はすでに約 150，創刊号は 4 月末の刊行を予定している．

EASD との共同企画である第 1 回 East-West Forum を第 53 回日本糖尿病学会年次学術集会の公式シンポジウムとして開催することとなり準備中である．東西の 2 型糖尿病の差異に関する討論が展開される．

②国際交流・教育活動に関する事項

World Diabetes Day（WDD）（11 月 14 日）には全国でさまざまな糖尿病啓発キャンペーンが実施されたが，年中行事となった歴史的建造物などのブルーライトアップは全国 88 箇所（海外 1,036 箇所）で施行された．各地の糖尿病対策推進会議が実施するライトアップに補助金を支出．その他，IDF・AASD 部会（清野裕部会長），JDI 部会（堀田饒部会長），EASD 交流部会（田嶋尚子部会長），ISPAD 部会（雨宮　伸部会長），広報部会（谷澤幸生部会長）の各部会は部会ごとの活動を展開している．

13）学術調査研究・教育に関する報告

理事　南條輝志男

新規の調査研究として，「2009 年度日本糖尿病学会 HbA1c 全国サーベイ」の申請があり，妥当であると判断し理事会にて承認された．また，糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会より活動期間の 1 年延長の申請があり承認された．

（1）日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会（開始：2004 年 7 月 19 日）　　委員長　清野　裕

本委員会は日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し，それぞれを評価するための検査法や結果の解析法を確立するとともに，今後標準的な評価法を提唱するため設置された．各委員がそれぞれの施設における調査経過の報告や調査研究に関する発言を行い，2007 年にシンポジウムを開催し，海外から本研究テーマに精通する研究者 2 名を招いて講演を依頼した．

海外の研究との比較も含め，日本人におけるインスリン分泌能とインスリン抵抗性に関する特徴について，各委員から「グルコースクランプ」，「ミニマルモデル」，「グルカゴン負荷試験」，「経口糖負荷試験」，「体脂肪分布」，「アディポネクチン，プロインスリン，炎症関連因子」などに関するデータの提出を受けて，各評価法での解析を行った．提出されたデータは専門のシステムエンジニアがデータベース化して多数例の集計成績を構築するとともに，客観的で精度の高い解析を行っている．経口糖負荷試験では 20,000 例，グルコースクランプでは 700 例，ミニマルモデルでは 500 例，グルカゴン負荷試験では 1,000 例を超えるデータを用いての解析を行い，インスリン分泌能とインスリン抵抗性の観点から，日本人の耐糖能低下要因に関する一定の知見が得られている．各施設の検査方法やデータ解析に関わる詳細な情報収集を終え，各施設間の検査方法や結果に関する類似点・相違点などについて議論

し，グループ間のデータ調整方法などについての合意を得て，最終的に集計報告を作成して，実態に沿った基準の提案を行う．各評価法による日本人の基準値を提示するべく，北から南まで全国レベルで，多施設からのデータを多数例について集積し，日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態解明が可能となったため，本年度をもって終了する．

(2)糖尿病関連検査の標準化に関する調査検討委員会

Committee on the standardization of diabetes-related laboratory testing（開始：2007 年 8 月 19 日）

委員長　柏木厚典

委員：南條輝志男，春日雅人，稲垣暢也，中村二郎，伊藤博史，富永真琴，及川眞一，野田光彦，河村孝彦，三家登喜夫，難波光義，柱本　満，笹原誉之，武井泉（日本臨床検査医学会），梅本雅夫（日本臨床化学会），村上正巳（日本臨床検査自動化学会），桑　克彦（日本臨床検査標準協議会），小栗孝志（日本臨床衛生検査技師会），委員会事務局　西尾善彦

1. HbA1c 国際標準化に関するわが国の対応と HbA1c の精度管理と標準化

2009 年度の本委員会では HbA1c 国際標準化について重点的に討議を行った．昨年度までの検討内容を『委員会報告“HbA1c 国際標準化に対するわが国の対応”』を雑誌糖尿病 2009 年 9 月号に掲載し，HbA1c の国際標準化に関する日本糖尿病学会のこれまでの取り組みを報告した．

その後，2009 年 11 月 1 日に開かれた“糖尿病の診断基準と HbA1c の国際標準化に関するシンポジウム”での討議を受けて委員会での議論を重ね以下の結論を得た．

①HbA1c の定義として，β1-deoxyfructosyl Hb で安定型グリコヘモグロビンとなったものとする．②臨床の現場での混乱が懸念されるものの，国際標準化への対応として，今後，検査報告は主として NGSP 値で行うこととする．ただし，当面の間（2012 年 3 月まで）JDS 値も併記可能とし，今後，診断，治療ガイドライン，教科書等も NGSP 値で記載して NGSP 値を周知する．学会，論文等の記載は NGSP 値および IFCC 値の併記とする．③HbA1c の表記法に関して，NGSP 値については HbA1c（A1C）（単位は％）とする．JDS 値および IFCC 値については HbA1c（JDS）（単位は％）と表記するが，IFCC値の単位はmmol/molとする．また，HbA1c の表記については 1c の部分を下付きとせずに c を小文字で表記する．④JDS 値については JDSLot4 を標準品として従来どおりに測定し，HbA1c（A1C）（％）＝HbA1c（JDS）（％）＋0.4（％）により JDS 値より A1C 値を求める．

2. 2009 年度 JDS 全国 HbA1c サーベイを施行

HbA1c の精度管理に関して多くの懸念がだされていることから，HbA1c の測定施設のサーベイランスを参加施設全国約 933 施設で行った．この調査は日本糖尿病学会が主催し，後援として日本臨床化学会，日本臨床検査標準協議会，日本臨床検査医学会，日本臨床衛生検査技師会，日本医師会の共催にて行った．結果は平成 22 年 3 月中に終了し，第 53 回日本糖尿病学会で発表する予定である．

3. 日本糖尿病学会血漿インクレチン測定標準化ワーキンググループが，稲垣暢也京都大学教授を委員長として，本委員会の専門員会として組織された．検討結果は委員会報告として発表される予定である．

(3)糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会（開始：2007 年 7 月 16 日）

委員長　佐藤祐造

本調査研究委員会を平成 21 年 5 月 21 日，12 月 6 日，平成 22 年 4 月 11 日の計 3 回開催した．平成 21 年度の活動状況は下記の如くである．

全国の糖尿病外来に通院中の糖尿病患者 5,100 名を対象に，糖尿病運動療法の実施状況や課題等に関するアンケート調査を実施した．平成 22 年 3 月 26 日までに返答の得られた 4,176 名（平均年齢±標準偏差：60.6±12.2 歳，回収率：81.9％）の集計成績を報告する．

今回の調査によれば，糖尿病患者ではスポーツを好み，日常的にも軽度の身体活動を行っている者が半数以上みられた．診察時に食事指導を受けていた患者は 53％ であり，栄養士・管理栄養士，医師からはそれぞれ 64％，23％ であった．一方，診察時に運動指導を受けている患者は 45％ と食事療法とほぼ同率であったが，「受けたことがない」が 30％ も存在し，食事療法 10％ より多かった．医師より運動指導を受けている患者は 52％ に対し，健康運動指導士等からは 12％ にすぎなかった．運動療法を実行している患者は全体の 52％ にとどまり，指導内容として，運動種目（32％）や運動時間（27％）の指示が多く，種目としては歩行が最も多かった（49％）．

運動療法を実施している理由（複数回答）として，糖尿病を良くしたい，体重を減らしたい等を挙げており，運動を継続するために必要なこと（複数回答）は，時間，友人，家族，医師の指導等と回答した．一方，運動療法をしていない者の理由（複数回答）として，時間がない，指導を受けたことがない等の意見が多かった．

前年度の研究で報告した医師へのアンケート調査と同様，食事療法と比較して，運動療法の指導体制に関して「格差」が認められることが判明した．

次年度は，これまでの検討結果と日本人における糖尿病運動療法の効果に関するエビデンスを総合し,「糖尿病運動療法指導ガイドライン」(仮称）の刊行を予定している.

(4)1 型糖尿病に関する調査研究委員会

（開始：2007 年 12 月 23 日）　共同委員長：小林哲郎
共同委員長：花房俊昭

1) 劇症および急性発症 1 型糖尿病分科会（分科会委員長：花房俊昭）

グリコアルブミン/HbA1c 比により劇症 1 型糖尿病と 2 型糖尿病が鑑別できることを報告した（Ann Clin Biochem 印刷中）．インターフェロン投与後に発症した 1 型糖尿病 87 例が集計され，論文投稿準備中である. 2 型糖尿病に合併した劇症 1 型糖尿病, インスリン治療後に転化した 1 型糖尿病についても症例が集計され，詳細について検討中である．また，皮膚科学会と共同で，DIHS（drug induced hypersensitivity syndrome）を伴って発症した 1 型糖尿病についての調査を開始した.

2) 緩徐進行 1 型糖尿病分科会（分科会委員長：小林哲郎）

①委員会施設における糖尿病発症 5 年以内例の臨床像の前向き検討：これまでに 589 例を集積し，インスリン非依存糖尿病例中に約 10% の膵島関連自己抗体（GAD 抗体 and/or IA-2 抗体 and/or IAA）陽性例を認めた. GAD 抗体陽性率は他の抗体と比べて有意に高頻度であった．委員会中間報告として機関誌「糖尿病」に投稿予定.

②全国調査：現在まで 38 施設の登録を受けている．さらに登録を増やし緩徐進行 1 型糖尿病の実態を明らかにして行く.

3)遺伝子解析チーム（チームリーダー：池上博司）

日本人 1 型糖尿病の体質を解明し，診断・予防・治療へ展開することを目的に，3 病型(急性発症，劇症，緩徐進行)における遺伝子解析を進めている．HLA との関連に関する 3 病型間での異同を論文としてまとめて報告した(*Diabetologia* 52:2513–21, 2009). SNP(900K) を用いたゲノムワイド関連解析（GWAS）の一次スキャンで HLA 領域にゲノムワイド有意水準で関連する SNP を全病型とも複数認めた．HLA 以外で関連が示唆される領域に関して P 値を基準に再現性解析用 SNP を抽出し, 優先順位の高い第一セット(96 SNP)に関して二次パネルを用いたタイピングを完了した.

(5)糖尿病診断基準基準検討委員会

委員長　清野　裕

委員：田嶋尚子(副委員長), 南條輝志男(副委員長), 荒木栄一，伊藤千賀子，稲垣暢也，岩本安彦，柏木厚典，春日雅人，門脇　孝，花房俊昭，羽田勝計，植木浩二郎（幹事）

アドバイザー：磯　博康，清原　裕，葛谷　健，島健二，富永真琴，野田光彦

執筆補佐：高本偉碩，田中治彦

委員会開催：平成 21 年 4 月 26 日（日），8 月 15 日（土），10 月 12 日（月）11 月 29 日（日）

幹事会開催：平成 21 年 6 月 27 日（土），7 月 27 日（月），平成 22 年 4 月 3 日（土）

糖尿病の診断基準と HbA1c の国際化に関するシンポジウム開催：平成 21 年 11 月 1 日（日）

Writing 委員会開催：平成 22 年 2 月 7 日（日），2 月 21 日（日），3 月 27 日（土）

(6)日本を含めたアジア地域のメタボリックシンドロームの臨床像の把握およびその原因の解明に関する調査研究委員会　委員長　南條輝志男

日本を含めたアジア地域においてメタボリックシンドロームの重要性は幅広く認知されているものの, 現時点では診断基準が複数存在している．特にウエスト周囲径のカットオフ値に関して意見が分かれている．本委員会では, 日本を含めたアジア地域においてメタボリックシンドロームの臨床像の実態調査を進め, アジア地域共通のウエスト周囲径のカットオフ値が設定可能かどうかなどを検討する予定であり, 現在, 共通の研究プロトコール・調査票を策定し, アジア各国の共同研究者に配布, データ収集を行っているところである.

(7)「2009 年度日本糖尿病学会 HbA1c 全国サーベイ」調査研究委員会　委員長　柏木厚典

2009 年度 JDS 全国 HbA1c サーベイ概要

1. 主催　日本糖尿病学会
   担当委員会：日本糖尿病学会糖尿病関連検査の標準化に関する委員会
   協力委員会：日本臨床化学会糖尿病関連指標専門委員会，日本臨床検査医学会，日本臨床検査標準協議会
   事務局集計等協力機関：(社）臨床検査基準測定機構（JRMI）
   試料調製・配布機関：(社）検査医学標準物質機構（Laboratory of ReCCS）
   協力会社：HbA1c 測定用の装置・試薬の製造・販売等の会社
2. 試料配布：2010 年 1 月下旬から 3 月上旬(4 つのサイクルにて行う）

3. 測定実施：2010年1月下旬から3月上旬(4つのサイクルにて行う)
4. 報告：所定の報告用紙に必要事項を記入し，同封の封筒で投函する.
5. 試料レベル：低，中，高の3濃度（凍結血液）の計3種
   1)ユーザー(登録衛生検査所も含む)
   ：低，中，高の3濃度
   2)メーカー(1)項に関わるメーカーおよびNGSP実施機関)
   ：低，中，高の各3濃度および全血検体（部分溶血を含む）
6. 参加施設：1)ユーザー：実施数は約933施設(登録衛生検査所も含む)
   2)メーカー：1）項に関わる当該メーカー，配布試料は総数963件(同一メーカーで複数測定法を検討)
   3)NGSP実施機関：NGSP値を提供することが認められている機関
   4)参加取りやめ，報告書未提出総数53件
   5)最終報告件数：867件（同一メーカーの複数報告は1メーカーと計算)
   6)最終参加施設数883施設
   医療機関753施設（85%）
   登録衛生検査所114施設（13%）
   製造業者　20施設（2%）
7. 参加費
   (1)医療機関：無料
   (2)登録衛生検査所：2万円
   (3)メーカー：5万円
   (4)NGSP実施機関：5万円
   注：メーカーとNGSP実施機関が同一の場合は，いずれか一方での参加登録を行う.
8. 参加申し込み締め切り
   2009年11月30日
9. 糖尿病学会　HbA1cサーベイ　見積書
   約900施設に，3レベル各3種・計9種類，全血試料1種類をランダムに配布.

糖尿病及びノーマル血液（20人分）

	3,000,000円
測定代金	2,000,000円
梱包，発送代金	1,800,000円
データ集計等事務経費	200,000円
合計	7,000,000円

10. 評価：試料毎にHbA1c基準測定施設で目標値を設定し，バイアス評価を行う.

※以下の名前で案内した.
社団法人日本糖尿病学会（JDS）
理事長　　門脇　孝
同会糖尿病関連検査の標準化に関する委員会
委員長　　柏木厚典

14)平成22年度坂口賞および学会賞に関する報告
1)坂口賞は，佐藤祐造氏に授与する.
2)学会賞審査委員会（委員長　伊藤千賀子）を平成22年1月24日に開催し，各受賞者を選出した.
①平成22年度ハーゲドーン賞
柏木厚典（滋賀医科大学内科学講座（内分泌代謝内科））
「糖尿病性血管障害の発症，進展の予防及びその可逆性をめざした新しい病態の解明とリスク因子の同定」
②リリー賞
ⅰ）曽根博仁（筑波大学水戸地域医療教育センター内分泌代謝・糖尿病内科）
「日本人糖尿病患者の特徴と病態に関する大規模臨床疫学的研究」
ⅱ）薄井　勲（富山大学医学部第一内科）
「2型糖尿病のインスリン抵抗性における炎症の役割」

15)学会認定事業に関する報告
(1)専門医認定委員会　　委員長　柴　輝男
委員改選に伴い，委員長の選出を行った．その結果，委員長は柴委員に決定した．委員会は小委員会も含め8回開催された．平成21年度の専門医試験は292名が受験し，236名が合格した．研修指導医は118名(随時審査も含む)，認定教育施設は44施設（無床2施設含む)，教育関連施設6施設，連携教育施設3施設が認定された．更新は専門医789名・研修指導医241名・認定教育施設69施設であった.専門医新規・更新申請書類の症例報告は記載漏れのチェック作業がかなりの時間を要するため，書類を電子化（PDF）し記載漏れの場合アラート表示ができるシステムを導入した．専門医・研修指導医新規申請の業績として認める雑誌をまとめた．専門医にはカードを配布し，年次学術集会等の専門医更新単位登録をバーコードで読み取ることとした．来年度には指定の講演の聴講を義務付けるようにしたい．今後は糖尿病臨床研修・研修カリキュラムの評価等，研修指導医の達成評価の確認など制度の整備を行う予定である.

(2)専門医試験委員会　　委員長　荒木栄一

平成21年5月21日，第30回試験委員会が開催された．委員の改選に伴い，委員長の選出を行なった．その結果，荒木理事が委員長となった．第20回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担，口頭試験担当者，試験監督担当者を決めた．8月23日に委員長，数名の委員により筆記試験問題（選択・論述）のチェックを行い，9月13日には委員全員で試験問題の選定を行った．第20回専門医試験は，平成21年10月25日，東京国際フォーラムにおいて実施した．受験者には昨年同様，事前に一部出題範囲・面接での評価について公表し，選択問題もマークシート方式で実施した．受験者は292名で，11月1日に合否判定案を決定，11月23日専門医認定委員会に報告，236名の合格（合格率81％）が承認された．今年度も希望のあった受験者に対し，成績の開示を行った．

第21回（平成22年度）の試験は平成22年10月24日（日）東京国際フォーラムにて，第22回（平成23年度）は平成23年10月23日（日）に実施の予定．

平成22年3月には専門医認定委員会と専門医試験委員会との合同ワーキンググループを設置し，試験の在り方，評価方法について検討を行っている．

16)分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会　齋藤　康

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は，平成21年10月9，10日の2日間に亘って槇野博史会長（岡山大学大学院腎・免疫・内分泌代謝内科学）の下，第24回日本糖尿病合併症学会年次学術集会を岡山の岡山コンベンションセンターにて開催した．

年次学術集会は，シンポジウム6題，そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた．市民公開講座も10月10日に開催された．本学会が設けた学会賞各賞の受賞者は以下の各先生で，Outstanding Foreign Investigator Awardは Kumar Sharma 先生（Center for Renal Translational Medicine, Department of Medicine, University of California, San Diego/VA San Diego Healthcare System, La Jolla, California, USA），Distinguished Investigator Awardは馬渕　宏先生（金沢大学脂質研究講座），Expert Investigator Awardは山田信博先生（筑波大学），Young Investigator Awardは窪田直人先生（東京大学大学院糖尿病・代謝内科），片上直人先生（大阪大学医学部附属病院内分泌・代謝内科），神谷英紀先生（名古屋大学医学部CKD地域連携システム講座），東　浩介先生（順天堂大学内科・代謝内分泌学）に贈呈され，受賞講演が行われた．

平成22年に予定されている第25回日本糖尿病合併症学会は，柏木厚典会長（滋賀医科大学医学部附属病院）の下，10月22，23日の2日間に亘ってびわ湖ホールを会場として開催されることが決定している．学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め3回発行された．

17)糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

理事長　門脇　孝

日本糖尿病対策推進会議の第10回，第11回幹事会が2009年7月27日，2010年2月7日に開催された．また，日本糖尿病対策推進会議の第3回総会が2010年2月7日に開催された．

(1)「対糖尿病戦略5ヵ年計画」作成委員会

委員長　岩本安彦

委員：渥美義仁，荒木栄一，稲垣暢也，植木浩二郎，佐倉　宏，谷澤幸生，野田光彦，花房俊昭，羽田勝計

委員会：開催なし

下記内容で「第二次対糖尿病戦略5ヵ年計画（案）」を提示し，パブリックコメントを受付け中である．

1. 第一次5ヵ年計画の成果と課題
2. 対糖尿病5ヵ年計画策定の必要性
3. 「対糖尿病5ヵ年計画」における重点と目標
4. 糖尿病対策の考え方
5. 糖尿病の基礎的研究
6. 糖尿病の臨床的研究
7. イノベーションの成果に立脚した予防法・治療法を開発
8. 糖尿病撲滅にむけた社会環境の構築
9. 次世代の糖尿病研究・診療を担う人材の育成
10. 糖尿病対策の組織構成
11. 「対糖尿病5ヵ年計画」で予測される成果

(2)「健康日本21」の糖尿病対策検討委員会

委員長　伊藤千賀子

Ⅰ．委員会開催：平成21年7月12日，平成22年3月21日の2回開催

Ⅱ．「健康日本21」の糖尿病対策委員会活動

日本糖尿病対策推進会議の活動をより活発にするために具体的かつ実践的なプランを作成して7月28日の日本糖尿病対策推進会議幹事会へ提案した．内容は以下の如くである．

1. 「糖尿病治療のエッセンス　2007」の改訂．
2. 地域で糖尿病対策の街頭キャンペーン実施
3. 小学・中学・高校生に糖尿病に関する知識を普及させるためにポスターを作成して学校の保健室などで注意を喚起する．

これらの糖尿病学会からの提案に対して日本糖尿病

対策推進会議の幹事会(2009-7-28)では全て了承され，地域の糖尿病対策推進会議へも日本医師会からアクション　プランとして連絡された．その結果すべての都道府県で1〜5か所の著名な建物88か所をライトアップした．ライトアップ・街頭キャンペーン・講演会などのイベントの多くは医師会と連携して行われた．

Ⅲ.「糖尿病治療のエッセンスの改定作業」

改訂作業における内容のポイント：「糖尿病治療のエッセンス」はできれば2年おきに改正することとし，今回は「糖尿病治療のエッセンス 2010-2011」とする．日本糖尿病学会の診断基準を踏まえて改訂し，7月中には出版することが望ましい．

1. インクレチン関連薬（DPP-4阻害薬，GLP-1）の記載をどの様にするかを検討した．まだ日本人の評価や副作用で不明な部分もあることと本書が一般医家向けのために今回はこれらをまとめて「新しい血糖降下薬」として記載して一般薬と商品名の前に挿入する．

2. 一般薬と商品名については2007年以降に発売されたグリミクロンHA，今から発売されるメトグルコ等も加える．

3. 金澤先生からの貴重な提案は重複を避けて可能な限り反映させる．大森先生の妊娠糖尿病についても一般医家向けに記載する．

4. カテゴリー別に委員が分担して4月末までに改定案を作成する．その後委員会で十分検討する．この度は広告を若干募集して印刷費などの軽減を図る予定．

(3)糖尿病データベースの構築委員会

委員長　田嶋尚子

本研究は平成19年6月から調査研究を開始し，症例登録を始めた．平成19年度における仮登録数は7,700名であったが，平成22年2月現在における本登録症例数は6,326名（男性58.9%）で平均年齢は60.8（±8.1 SD)歳，糖尿病罹病期間は平均11.1年であった．対象症例の約半数に脂質異常症や高血圧の合併を認めたが，脳血管障害や心筋梗塞の既往をもつ患者はいずれも5%未満であった．喫煙歴ありは63.0%，2型糖尿病が5,902名（93.3%）と大多数を占めた．

追跡1年目の情報が返却されたのは平成22年2月現在，3,727名（本登録症例の58.9%）で男性が約60%を占めた．患者属性は，本登録した6,326名と比較して偏向はなかった．追跡1年目の情報が得られた3,727名について，合併症の頻度と治療内容を検討した．

追跡1年後に症例報告書が返却されたのは半数以下であったが，先行研究と比較してもサンプルサイズは3,727名と遙かに大きく，わが国の糖尿病合併症の実態を明らかにするために価値あるコホートと考えられた．

本研究を海外の著名な大規模前向き観察研究に匹敵するものとして継続していくためには，観察研究の命綱であるコホート（患者集団）の精度と高い追跡率が欠かせない．そこで，本研究の適正かつ円滑な遂行のために重要な方針決定を行う研究調整委員会（田嶋尚子委員長）を設置すると共に，国際医療センター（糖尿病情報センター）とデータベースを共同管理することとした．また，糖尿病学会内に本研究の運営を指導する研究統括委員会（南條輝志男委員長）をおいた．本委員会は研究調整委員会の報告を受けて必要に応じて勧告する，研究の進捗状況ならびに研究成果を評価し本研究が適切に施行されているかどうかを糖尿病学会理事会に報告する，などを行うこととした．

18)各種委員会

(1)糖尿病治療ガイド編集委員会

委員長　岩本安彦

委員：渥美義仁，荒木栄一，今村　聡，岩本安彦，柏木厚典，貴田岡正史，田嶋尚子，南條輝志男，野田光彦

委員会開催4回：平成21年8月12日(於：東京)，10月12日（於：東京)，平成22年1月11日（於：東京)，3月5日（於：大阪）

1. 編集委員の交替について

長らく委員を務められた門脇　孝先生から，本学会理事長に就任したため委員交替の申し出があり，後任として渥美義仁先生と野田光彦先生を推薦いただいた．両先生の承諾を得て，今年度から新委員として加わっていただくこととなった．

2.「糖尿病治療ガイド2008-2009」改訂について

以下の事項に重点を置き，「糖尿病治療ガイド2008-2009」の見直しを図った．

①本学会の出版物並びに他の学会のガイドラインとの整合性

②ヘモグロビンA1cの国際標準化と糖尿病診断基準改訂への対応

③インクレチン関連の新しい治療薬の掲載

とくに「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」の改訂との整合性をとりつつ，各章別に分担して大幅な改訂を行った．

3.「糖尿病治療ガイド2010-2011」発行スケジュール

平成22年4月に学術評議員校閲用委員会案を配布し，評議員の先生方からご意見をいただくとともに，糖尿病関連検査の標準化に関する委員会と診断基準検討委員会での検討結果を盛り込んだうえで，7月頃には改訂版を発行する予定である．

4.「糖尿病治療ガイド2008-2009」の発行部数と売上状況

平成21年5月　第5刷発行　　10,000部

同　　9 月　第 6 刷発行　　8,000 部
平成 22 年 2 月　第 7 刷発行　　3,000 部
（累計発行部数 17 万 1 千部）

なお，平成 22 年 4 月に第 8 刷 2,000 部を発行の予定である．

発行以来の累計売上部数（平成 20 年 2 月～平成 22 年 3 月末）は 167,509 部．

今期（平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月末）の売上部数は 22,812 部と，大変好評である．

(2)インターネット委員会　　委員長　田嶋尚子

①学会ホームページ

学会ホームページのアップデートやリンク依頼および広告掲載の許可等については，イ委員会委員メイリングリストを利用して審議，承認した．

②学会誌「糖尿病」のオンラインジャーナル

平成 21 年度から J-stage に変更した．平成 22 年 4 月現在，53 巻 2 号までが掲載されている．第 47 巻（2004 年）以前の冊子はアーカイブで一般公開されるが，掲載論文の著者からは学会から一括して同意を得ることとした．個人情報等に抵触するような場合は，J-Stage 担当者ならびにインターネット委員会において適切な対応をすることとなった．

③日本医療情報学会との合同シンポジウム

平成 19 年から日本医療情報学会との合同シンポジウムを同学会年次学会にて行ってきた．本年度は第 29 回医療情報学連合大会（11 月）で「糖尿病臨床における IT 化の真のニーズを発掘する」が開催され，野田光彦委員（シンポジスト）および田嶋尚子委員長（座長）が参加した．糖尿病領域における IT のニーズが大きくかつ緊急を要することから，平成 22 年 3 月，日本医療情報学会学会長より両学会の年次学術集会における継続的な合同企画シンポジウム開催の要請があった．

④インターネット委員会内規の見直し

平成 22 年 5 月にインターネット委員会を開催し，内規の見直しならびに委員の交代について審議する予定である．

(3)糖尿病性腎症合同委員会　　世話人　羽田勝計

平成 21 年度には 2 回の委員会（第 29 回：6 月 3 日，パシフィコ横浜会議センター，第 30 回：12 月 6 日，ベルサール神田）を開催した．本年度から，日本糖尿病学会・日本腎臓学会に加え，日本透析医学会が正式メンバーとなり，3 学会からなる合同委員会となった．討論内容は下記の通りである．

1. 糖尿病性腎症の病期分類の改訂について：数年後に行われる CKD ステージに関する国際分類の改訂，および新たに発足した厚生労働省班研究の成果を待って改訂することとした．
2. 糖尿病性腎症の食事療法の基準について：継続審議
3. JDCP study および DNETT-Japan の進行状況
4. 日本糖尿病対策推進会議および日本慢性腎臓病対策協議会の現状報告

(4)移植関係学会合同委員会膵臓移植中央調整委員会・臓器移植関連学会協議会報告

委員長　谷口　洋

（ⅰ）第 27 回移植関係学会合同委員会が平成 21 年 7 月 6 日に開催され，香川大学附属病院と藤田保健衛生大学附属病院が膵臓移植実施施設として承認された．厚生労働省健康局疾病対策課臓器移植対策室から本邦における臓器移植の現状，世論調査，WHO の「ヒト臓器移植に関する指針」改正の動向，「臓器の移植に関する法律」の一部を改正する法律案について説明があった．

（ⅱ）平成 21 年度移植関係学会合同委員会膵臓移植中央調整委員会が平成 21 年 9 月 16 日及び平成 22 年 3 月 12 日に開催され，平成 22 年 2 月 23 日現在の膵臓移植希望者申請書類受付は 376 件（そのうち膵腎同時移植は 322 件，膵単独症例は 51 件），平成 22 年 2 月 28 日現在のネットワーク登録済みは 282 件（内 64 件移植手術済み，3 件生体膵移植，28 件待機中死亡，18 件取り消し），現在登録中 169 件（膵腎同時移植は 139 件，膵単独移植は 30 件）であること，第 27 回移植関係学会合同委員会での香川大学附属病院と藤田保健衛生大学附属病院の膵臓移植実施施設としての承認が報告された．独協医科大学を膵臓移植実施施設として移植関係学会合同委員会に申請することを決定した．

（ⅲ）臓器移植関連学会協議会が平成 21 年 8 月 29 日，12 月 12 日及び平成 22 年 3 月 1 日に開催され，平成 22 年 7 月 17 日から全面施行となる改正臓器移植法に向けて，「臓器移植法改正後の移植医療の体制整備に関する提言」を本協議会のメンバーである日本医師会並びに 34 学会の承認を得て作成し，メンバーの各学会から最終確認を得ることにした．移植医療の体制整備状況に関する国会議員への報告会を平成 22 年 2 月 17 日に実施し，また行政へ提言に関する意見を通す目的で政務官への自由な直接交渉のルートが作られたことの報告があった．移植の適応評価を行う組織のオーソライズと経済的支援を厚生労働省に要望してゆくことが確認された．

(5)糖尿病学用語集編集委員会

委員長　石塚達夫

委員会は昨年度評議委員会終了後平成 21 年 6 月 21 日（金），9 月 23 日（土），12 月 27 日（日），平成 22

年3月22日（祝，月）の4回開催した．

第3版発行までのおよそのスケジュールを確認し，平成22年11月頃を目標とすることを確認した．

解説を付すべき用語として選定した用語のうち，解説者が未定であったものについて決定した．大規模臨床試験については，直接糖尿病患者に介入している試験に限って，用語解説を付すこととした．用語解説の執筆依頼をした61名のうち，依頼した文字数80～100字を超えているものがあり，校正の際に文字数を減らすこととした．

インスリン製剤の欧文表記について以下のような報告がなされた．①超速効型インスリン（rapid-acting insulin analogue）②速効型インスリン（short-acting insulin）③中間型インスリン（intermediate-acting insulin）④持効型溶解インスリン（long-acting insulin analogue）⑤混合型（二相性）インスリン（premixed（biphasic）insulin）．

昨年度すでに「削除すべき用語」の検討を終えているが，本年度は「追加すべき用語」および「解説を付すべき用語」の候補について1143語の検討をほぼ終了した．

今後さらに若干の用語について解説を追加したうえで，学術評議員用の見本を作成して配布する．現時点では，英和編・和英編ともに約200語を削除し，約300語を追加する予定である．新規に解説を付した用語は約140語である．

(6)専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会　委員長　岡　芳知

最近の糖尿病診療の進歩を取り入れ，改訂第4版を2009年4月末に発刊した．今後も必要に応じて改訂の予定である．

(7)倫理委員会　委員長　谷澤幸生

「糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会」佐藤祐造委員長より，「日本における糖尿病運動療法の実施状況に関する調査研究」について審査の依頼があり，倫理委員会で持ち回り審議を行なった．審議の結果，実施計画書，配付文書について若干の小修正を求めた後に，上記研究は倫理的に妥当であると判断し，実施を承認した．

また，1型糖尿病調査研究委員会の共同委員長，小林哲郎委員長・花房俊昭委員長より提出された「1型糖尿病関連遺伝子群の多施設共同研究」の期間延長に関し承認した．

(8)科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会　委員長　田嶋尚子

平成21年度は，全体委員会を2回（平成21年8月28日，平成22年5月2日），査読委員会を2回（平成21年8月14–15日，平成22年4月16日）開催した．また，一部の章（「血糖降下薬による治療」「糖尿病と歯周病」「肥満に伴う糖尿病」「妊婦の糖代謝異常」「小児・思春期における糖尿病」「糖尿病における急性代謝失調」）については査読会を平成21年3–5月に開催した．

新しい糖尿病の診断基準，HbA1c値に関する取り扱い，妊娠糖尿病の定義に関する最終報告の内容を反映させるために，改訂第3版の刊行は延期し，平成22年7月上旬を予定した．

改訂第3版における改訂方針は以下の通りである．

1)最新の文献を追加し，改訂第2版にあった21章と付録のすべての記載の見直しを行う．さらに新たに「糖尿病と歯周病」および「糖尿病と感染症，シックデイ」の2章を追加する．

2)全体として頁数を増やさない（依頼頁数を大幅に超過している場合には，とくに文献数・アブストラクトテーブルの内容を中心に省略するよう，各執筆者に依頼する）．

3)ステートメントは基本的事項を簡潔に記載し，詳細は「解説」で記載するという基本方針を徹底する．

4)掲載文献の掲載の基準は，1)エビデンスレベルの高いものを中心とする，2)日本発のエビデンスはなるべく採用する，3)治験データは採用しない（ただし，重要なものは除く），とする．

5)用語を統一する．

6)薬剤名については，ステートメントでは「分類名」のみの記載とし，解説では「一般名」での記載も可とする（「商品名」は一切記載しない）．

7)文献の著者は，「3名＋et al（ほか）」とする．

(9)将来計画委員会　委員長　羽田勝計

平成21年度には，3回の委員会（第4回：5月21日（木），大阪国際会議場，第5回：11月21日，済州島，第6回：平成22年4月9日，八重洲冨士屋ホテル）の委員会を開催し，以下の議論を行った．

1. 年次学術集会および糖尿病学の進歩運営の一貫性と学会事務局の関与
2. 医系事務職員（非常勤）の雇用について
3. 年次学術集会における Young Investigator Award の創設について
4. 各支部および地方会の運営に関して

この中で，2.，3.に関しては理事会への提言を行った．2.に関しては，平成22年4月より採用予定，3.に関しては，第54回年次学術集会からの創設を目指して「年次学術集会運営委員会」でご検討いただくこととなった．

(10)パブリックリレーションズ委員会
委員長　加来浩平
委員：渥美義仁，植木浩二郎，小田原雅人，春日雅人，河盛隆造，田嶼尚子，寺内康夫，戸辺一之，濱野久美子，松田昌文，吉岡成人（50 音順）

本委員会は(1)糖尿病に関する学術情報，研究・調査の成果，国内外で蓄積されたエビデンスなどを社会に公開し，学会の公益性を高めるとともに，国民の健康増進に寄与する，(2)糖尿病に関する知識の啓発活動を行うことを目的に活動するものである．本委員会活動の推進のためには，社会連携と広報のおおまかに 2 つの機能を持つ必要がある．委員会活動の実効性を高めるため，委員会内にワーキンググループを設置し，包括的かつ具体的な検討を行う．H21 年度は 5 月 15 日に委員会を開催した．学会活動方針等の定期的発信のため，社会一般，マスコミ，学会会員を対象とした理事長による President address を年次学術集会の期間中に行うことが決定され，第 53 回年次学術集会から実施する．また学会外からの問い合わせに対する緊急の対応体制，学会からの自発的な方針・成果の発信体制を討議し，広報・声明内容や WG 起案活動案の承認に関し理事会承認が必要な案件については，理事会を招集することなく，事務局からの e mail にて各理事の意思を確認することで対応する，情報発信対応体制を整えた．

(11)利益相反委員会　委員長　加来浩平
委員：岩本安彦，岩崎直子，梅田文夫，小泉順二，寺内康夫，前川　聡，山根公則，山田雅康（顧問弁護士）(50 音順)

H21 年度の委員会を 5 月 21 日に開催した．H20 年より内科系関連 14 学会 COI 指針協議会において共通の COI 指針案としての「臨床研究の利益相反指針」の策定が進められてきたが，H21 年 3 月 2 日の協議会において 14 学会の代表者によって指針案の協議が行われた．その結果を受けて，本委員会では日本糖尿病学会もこの指針案を基に本学会の COI 指針の策定を行うことで基本的合意を得た．H21 年 12 月 16 日に内科系関連 14 学会 COI 指針協議会が開催され，共通指針の最終案がまとめられた．それを受けて H22 年 1 月に入り，協議会から学会宛に，共通指針を採用するかの問い合わせがあった．委員長名で各理事に意見を求めた結果，幾つかの指摘をいただいたものの，基本的に問題ないと判断され，本学会としては，共通指針を受け入れる旨を連絡した．今後は，本学会の方針に則り，本委員会において出来るだけ早急に細則案を検討する予定である．

(12)定款・細則検討委員会　委員長　加来浩平
委員：河盛隆造，羽田勝計，富永真琴，岩本安彦，寺内康夫，中村二郎，稲垣暢也，井口登与志
事務局：山田雅康弁護士，久保まゆみ会計士，植木浩二郎事務局長

平成 22 年 2 月 28 日に委員会を開催した．法人移行に関して，会員からの意見を聴取するために，21 年 9 月に学会誌および学会ホームページに「法人移行に関する意見募集」を掲載したところ，全く意見が寄せられなかったことを報告した．また現状の問題点と今後の対応について協議した．公益法人化を目指す場合，予算の立案およびその執行のバランスを取らなければならないことから，学術集会の在り方を根本から見直す必要があること，バランスを保持するためには，事務局の強化と役員および各活動の責任者の理解と協力が不可欠であることなどが挙げられた．これから H25 年の期限内に，全体のコンセンサスが得られるかどうか，また，そのようなシステムの運用にすぐ順応できるかどうか，意識改革には時間がかかるのではないかとの懸念が出された．このことから，まず期限内に，一般社団法人となり，それから体制を整え，公益法人を目指す方が堅実ではないかという見解の集約をみたため，H22 年 3 月の臨時理事会においてその旨を報告し，了解を得た．

それに基づき，今後の学会の行動計画としては，H 22 年 5 月の総会にて，法人移行の方向の決定についての理事会一任を取り付ける，H23 年 5 月の総会で新定款の承認を取り付ける，H23 年秋には内閣府に認可申請の手続きを行う，24 年には新法人として活動を開始するというスケジュールになるとの見解に至った．

4.「糖尿病学の進歩」開催について

第 46 回「糖尿病学の進歩」(東北支部)
会　期　平成 24 年　月　日（金）・　日（土）
会　場（未定）
世話人（未定）

5. 平成 21 年度収支決算に関する件（羽田理事）

総会で審議の上，21 年度収支決算書が承認可決された．(本号 p549～p573)．

6. 平成 22 年度補正予算並びに平成 23 年度事業計画および収支予算に関する件（河盛理事・羽田理事）

総会で審議の上，平成 22 年度補正予算並びに平成 23 年度事業計画および収支予算が承認可決された．(本号 p574～p587)．

7. 名誉会員の推薦に関する件

理事会が推薦した佐藤祐造会員が総会において承認された.

8. 学術評議員の承認に関する件

今年度は該当者がなかった.

9. 次々会長（第 56 回学術集会）の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第 56 回会長に荒木栄一学術評議員が選出され，総会において承認された.

10. 第 54 回年次学術集会に関する件

平成 23 年 5 月 19・20・21 日の 3 日間，さっぽろ芸術文化の館，札幌市教育文化会館，他（札幌市）において開催の予定である.

11. 理事および監事の承認に関する件

各支部および理事会から推薦された 18 名の理事候補者と学術評議員会から推薦された監事候補者 2 名の就任が承認された.

1. 理　事

支　　部	氏　　名	所　　属
北海道	羽田　勝計	旭川医科大学内科学講座
東北	岡　　芳知	東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学
関東甲信越	渥美　義仁	東京都済生会中央病院
	岩本　安彦	東京女子医科大学糖尿病センター
	春日　雅人	国立国際医療センター研究所
	門脇　　孝	東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科
	田嶼　尚子	東京慈恵会医科大学
中部	小泉　順二	金沢大学附属病院総合診療部
	中村　二郎	名古屋大学大学院医学系研究科
近畿	稲垣　暢也	京都大学大学院医学研究科糖尿病・栄養内科学
	南條輝志男	和歌山県立医科大学
	花房　俊昭	大阪医科大学第一内科
	横野　浩一	神戸大学大学院医学系研究科老年内科学
中国・四国	加来　浩平	川崎医科大学糖尿病内分泌内科
	谷澤　幸生	山口大学大学院医学系研究科病態制御内科学
九州	荒木　栄一	熊本大学大学院生命科学研究部総合医薬科学部門
	梅田　文夫	行橋中央病院
理事会推薦	清野　　裕	関西電力病院

以上 18 名

2. 監　事

武田　　純	岐阜大学大学院医学系研究科内分泌代謝病態学
田中　　逸	聖マリアンナ医科大学代謝・内分泌内科

以上 2 名

12. 小児糖尿病委員会委員の交代に関する件

任期満了に伴い小児糖尿病委員会の委員が交代することとなった.

小児糖尿病委員会 2010 年度選出委員（2010 年度～2013 年度）

北海道支部	母坪　智行	NTT 東日本札幌病院　小児科
東北	高橋　和眞	岩手医科大学糖尿病代謝内科
関東甲信越	雨宮　　伸	埼玉医科大学　小児科
	浦上　達彦	駿河台日本大学病院　小児科
	宮本　茂樹	聖徳大学短期大学部　保育科
中部	臼田　里香	富山県立中央病院　内科
近畿	川村　智行	大阪市立大学大学院　発達小児医学教室
	宅見　　徹	市立小野市民病院　小児科
中国四国	横田　一郎	国立病院機構香川小児病院臨床研究部/小児科
九州	岡田　　朗	（医）岡田内科クリニック

13. 平成 22 年度選挙管理委員会委員の承認について

細則第 38 条により，下記の様に承認された.

北海道支部	渥美　敏也	西成病院糖尿病センター
東北	高橋　和眞	岩手医科大学糖尿病代謝内科
関東甲信越	山田　信博	筑波大学大学院人間総合科学研究科
中部	榊原　文彦	住吉町クリニック　内科
近畿	三家登喜夫	和歌山県立医科大学付属病院
中国四国	松木　道裕	川崎医科大学糖尿病・内分泌内科
九州	豊永　哲至	国立病院機構熊本医療センター　内分泌・代謝内科
会長経験者	岡　　芳知	東北大学大学院医学系研究科

14.「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 42 条により，下記の様に決定された.

「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

第 44 回「糖尿病学の進歩」世話人　三家登喜夫

第 45 回「糖尿病学の進歩」世話人　山田研太郎

第 53 回会長　加来　浩平

第 54 回会長　羽田　勝計

学術担当常務理事　南條輝志男

15. 専門医認定委員会委員の交代に関する件

専門医認定委員会委員が交代することとなった.

		新	旧
専門医認定委員会	近畿支部	金藤秀明	松久宗英

16. 専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会委員の追加に関する件

委員を 1 名追加することとなった.

専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会

新任　片桐　秀樹

17. 学会後援について

申し込みのあった 2 件を後援することとした.

1. 糖尿病重症化予防（フットケア）研修会

平成 22 年 3 月 20 日～21 日

2. 2010 年度全腎協全国大会 in 和歌山

平成 22 年 5 月 23 日

18. 法人移行に関する件

法人制度の変更に伴う法人移行の計画について，平成 23 年に開催する学術評議員会および総会において定款の変更を含む決議を行うこと，および一般社団法人または公益社団法人の選択については理事会に一任することが承認された.

19. 診断基準の改定・HbA1c 国際標準化に関する件

糖尿病関連検査の標準化委員会の柏木厚典委員長が, HbA1c の国際標準化に関して説明を行い承認された．糖尿病診断基準検討委員会の清野裕委員長が「糖尿病の分類と診断基準に関する委員会報告」の説明を行い承認された．これらの内容はプレスリリースにて概要を公表することとした.

また，HbA1c の国際標準化にともない，本学会の出版物などに掲載する治療の指標と評価などについては，別途委員会を設けて審議し，改訂することとした.

20. 第 2 次対糖尿病 5 カ年計画とアクションプランに関する件

昨年理事会で承認され，学会員からのパブリックコメントを求めていた第 2 次対糖尿病 5 カ年計画が承認された．これに伴い，本年次学術集会において第 2 次対糖尿病 5 カ年計画に基づいた本学会のアクションプラン（DREAMS）を発表すること，また同時にこれについてもプレスリリースを行うことが承認された.

21. 会費 2 年以上滞納者に関する件

定款第 11 条第 3 号により会費 2 年以上滞納者 87 名の除名を決議した.

以上　　文責　庶務担当常務理事　河盛隆造